



生徒の主体的な学びを促すこと、生徒の主体性を引き出すことは、近年の教育のトピックの一つとなっています。

1990年頃から強調されるようになり、現行の高等学校学習指導要領(2009年告示)でも、総則の「教育課程編成の一般方針」の中で、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力、判断力、表現力その他の能力の育成」とともに、「主体的に学習に取り組む態度を養う」ことが挙げられています。

また、取材の際やアンケートで、高校の先生方に高校教育の課題を聞くと、「生徒が主体的に学習に取り組まない」「以前と比べると生徒が主体性を発揮していない」といった声が挙がります。

しかし、そうした声をよく聞いてみると、「主体的な学び」「主体性」と一口に言っても、先生によってイメージするものは異なるようです。

では、いま高校生に求められている「主体的な学び」「主体性」とはどのようなものなのでしょうか？

社会で求められる主体性と、高校で養われる主体性は、どのようにつながっているのでしょうか？

高校の先生はどのようなときに生徒の主体性に課題を感じるのでしょうか？

生徒の主体性を引き出す教員の関わり方とは？

この特集では、高校の先生方へのアンケートやインタビューと、研究者へのインタビューから考えます。

守屋 淳 教授

ポスト近代社会への変化の中で 児童・生徒の主体的な学びが求められる

近年、学習指導要領などで「子どもが自ら学び、自ら考える」ことや「主体的な学び」が強調されていますが、その背景には社会の変化があります。

1970年代頃から、いわゆる「落ちこぼれ」となる生徒が増加し、さらに1980年代にはいじめや不登校が社会問題となりました。そして、それまでの「詰め込み教育」、つまり生徒にできるだけ多くの知識を与えようとする教育に批判が集まり、生徒が受身的で一方的な授業を変えていかなければならない、ということが議論されるようになりました。

「主体的な学び」が強調されるようになったのは、1990年前後からです。この時期、日本ではバブル経済が崩壊し、経済成長が緩やかな時代となりました。世界的に見ても、国際化・情報化の進展、科学技術の発展など社会が急激に変化する「ポスト近代社会」に移行し、人類は、環境問題、少子高齢化問題など、これまで考えたことのないような新たな課題に直面するようになりました。そうした課題には決まった答えがありませんから、学校で学んだ知識だけでは対処できず、私たちは自ら問題点を見つけ、情報を収集して考え、判断してより良い解決策を模索していかななくてはならなくなりました。

このような時代の変化に即して、1989年改訂の学習指導要領では、知識・技能に偏らず、自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力などの資質や能力を重視する「新しい学力観」が提唱されました。そして1996年には中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で「生きる力」を提唱、1998年の小・中学校、1999年の高校の学習指導要領改訂では総合的な学習の時間を導入するなど、その方向性は継続されました。

さらに、現在議論が続いている次期学習指導要領では、「課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」、

いわゆるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の充実が改訂のポイントの一つとされています。これからも、児童・生徒の主体的な学びは、一層推進されていくと考えられます。



守屋 淳 教授

民主主義の担い手育成のためにも 求められる主体的な学び

もう一つ、民主主義の担い手を育てるという観点からも、主体的な学びは求められます。民主主義とは「独裁」の反対を意味する言葉で、国民一人ひとりが国の制度や法律を決める権利を持っていることが特徴です。そして民主主義国家では、人々はそれぞれ異なる考えを持っていますから、互いの考えを聴きあい、納得できる結論を見出していく必要があります。

日本は民主主義国家ですが、国民の現状を見ると、自分たちが主人公であるという意識が乏しいように思います。政治のことは政治家に任せればいい、選挙で自分が投票しても何も変わらないだろうといった諦めも感じます。

私はこの要因の一つに、学校教育の中で、児童・生徒が自分で考えることを、あまり大事にされてこなかったことがあると考えます。自分で一生懸命に考えて、友達と話し合っ解決していくという経験が乏しいと、社会に出てからも、自分たちが社会の主人公だという感覚をもてなくなるでしょう。日々の授業の中でも、意見を求められた時に教師が望む答えを言えなければ受け流されてしまうといったことが重なれば、自分で考え、意見を言おうとする気持ちは失われてしまいます。

そうした面からも、児童・生徒の主体的な学びを可能にするように学校教育が変わっていくことが求められているのです。選挙権年齢が18歳に引き下げられたこともあり、今後はその重要性がさらに増すでしょう。

児童・生徒の主体的な学びを可能にするには 「与える教育観」から 「支える教育観」への転換が必要

では、主体的な学びとはどのようなものでしょうか。「主体」を辞書で調べると、さまざまな定義がなされていますが、「自分の意思による行動」「自発的」「能動的」「自由」といった特徴があるようです。つまり、「主体的な学び」とは、児童・生徒が「自発的、能動的に、自由に自分の意思によって学ぶ」ことと言えます。

しかし一方で、学習指導要領に規定されているように、学校教育には、将来の社会を生きていく一員として学ぶべき事柄があります。そうした身につけるべき内容を、「主体的な」児童・生徒が十分に学べるのか、例えば教師や保護者が教え込んだほうが良いのではないかと疑問を感じる人もいるでしょう。他にも、「自由だけでは子どもは学ばないので、まず教師がしっかり教えるべきだ」とか、「自由にさせて学べるのは一部の優秀な子どもに限られる」といった考えもあると思います。

そうしたときに、児童・生徒の主体的な学びをどう実現させるのかは、教師の教育観に関わる大きな問題となるのです。

私は、教育観には「与える教育観」「放っておく教育観」「支える教育観」の3つがあると考えています。

「与える教育観」は「子どもは何も知らないのだから、正しいことを知っている大人が、正しいことを子どもに与える」というものです。これに対して「放っておく教育観」は、「子どもの自主性を尊重しなければならないという立場から、学びを子ども任せにしてしまう」ものです。そして「支える教育観」は、「大人が適切に支えることによって、子どもが主体となって学ぶ力が育つ」という教育観です。

ここで気をつけていただきたいのは、それぞれの教育観が示すのは、教育に関する基本的なものの見方であって、例えば「支える教育観」を持つ教師が、全く知識を与えないということではないことです。また、3つの教育観をバランスよく持つべきということでもありません。私は、児童・生徒の主体的な学びを実現するためには、全ての教師が「支える教育観」に基づいて授業をすることが必要だと考えています。

現在、生徒の主体性に課題を感じる小・中学校や高等学校の先生もいると思いますが、それは生徒に主体性が

ないからではありません。学校で「与える教育観」に基づいた教育が行われており、生徒にとって学校が主体性を発揮できる場になっていない可能性があることを意識していただきたいです。

主体性は、人間にもともと備わっているものです。赤ちゃんは、歩き方を教わったわけではないのに転んだりしながらも歩くためのチャレンジをやめず、日本語教室に通ったわけでもないのに、日本語を習得していきます。身の周りの出来事に自分から興味を持ったり、周りの大人たちがしていることを自分でもできるようになりたいと意欲を持って、「自発的、能動的に、自由に自分の意思によって学ぶ」力は、生まれながらに持っているのです。

そのため、教師が「支える教育観」を持つとともに、児童・生徒が主体性を発揮できるような教育を行うことが求められているのです。

しかし多くの教師は、「与える教育観」に基づいた学校教育を受けてきているため、自身でも「与える教育観」による授業を行っている場合が多いのではないのでしょうか。例えば、知識を与えることが目的となり、生徒が理解していないにもかかわらず教科書を進めてしまうような授業をしている場合も見られます。そして、そうした授業を続けていると、生徒が本来持っている主体的に学ぶ力は次第に失われてしまうのです。

生徒に関心を持ち、教科の面白さや 学ぶ意義を生徒に伝えることが重要

では、どうすれば生徒が主体的に学びたくなるような授業ができるのでしょうか。私はまず、もっと教師には、生徒に関心を持っていただきたいと思います。関心を持つとは、自分の授業を生徒がどう聴いているのか、理解しているのかをわかろうとすることです。そこがわかれば、生徒の学びを支えることができるように、次の授業を工夫することができます。

次に、生徒が教科を学ぶことの楽しさを感じられる授業をすることが大切です。高校教師は担当する教科が面白くて好きだからこそ、教師になったはずで、その面白さを、生徒にも是非体験させてほしいと思います。

生徒によって興味・関心は異なりますが、苦手であってもその教科を学びたいと思えるような授業をすることが重要です。例えば、埼玉県のある高校は、大半の生徒は数学が嫌いでした。しかし微分の単元で「折り紙の四

隅を切って体積が最大になる箱を作る」という課題に取り組むなど、実際の場面に即して考えられるような授業を導入したところ、数学の難しい問題を解くことはできなくても、多くの生徒は数学的な考え方に興味を持ち、数学が好きになって卒業していくようになったそうです（出典：仲本正夫（2005）『新・学力への挑戦－数学で新しい世界と自分が見えてくる』かもがわ出版）。

その一方で、成績が良い生徒であっても、テストで高得点を取ることに喜びを感じているだけの場合があります。そうした生徒にも、教科の本質的な面白さを感じてもらえるような授業をすることが必要です。

教科の内容と社会とのつながりを教師自身が考え、それを生徒に伝えることも重要です。経済が右肩上がりだった時代、大学進学率が高くなかった時代には、教えられた知識を覚えて大学に進学すれば良い生活を送れるという将来像を描くことができ、社会とのつながりも感じられたため、生徒は授業の内容に関心がなくても、勉強できました。しかし、現在は大学を卒業しても希望の進路を実現できるとは限りませんし、職業も多様化しています。そのような時代に、大学入試ばかりを意識した授業をしても、生徒は自ら学ぼうとは思わないでしょう。教師それぞれが、自分の教科が生徒にとってどのような意義があるのか、考える必要があるのです。もし教師が「勉強はつまらなくても我慢してやるものだ」という考えを持っているとしたら、それは改めるべきです。

各教科の面白さが伝わり、学ぶ意義も感じられれば、生徒は積極的に授業に参加するようになりますし、授業で時間が足りなければ自ら学ぶようになります。しかし興味を持たず必要性も感じられない授業であれば、生徒は話を聴かず、机に伏せて眠ったり、大学入試で課される他の教科を勉強したりといった行動をしてしまいます。何がわからないかもわからなくなるため、授業が理解できなくても質問できませんし、もちろん自学自習もしません。そうすると、教師から見て「主体性のない生徒」になってしまうのです。

生徒が主体性を発揮する授業手法として注目されるアクティブ・ラーニング

生徒が主体的に学べるような授業は、従来型の一斉授業でも可能です。ただ、一斉授業で全ての生徒が本気で学ぶ状況を作り出すことは難しいため、ALのような手法

を取り入れるのは有効です。文部科学省がALの導入を推進しているのには、そのような事情もあるのです。

例えば、東京大学教育学部附属中等教育学校では以前、日本史の授業で、4人グループで年表を作成する学習に取り組んでいました。生徒は自分たちで教科書や資料集を見るなどして、年表を作ります。自分たちで考えて自分たちで書きますから、教師が説明するより、理解が深まり内容も定着します。また、生徒同士で話し合った方が、進度も速かったそうです。

生徒は協働的に学ぶ場では、一斉授業よりわからないことを「わからない」と表明しやすくなります。質問された生徒も、わかったつもりが説明しようとするとはよくわかっていなかったということに気づき、深く考えるようになった結果、さらに学力が伸びるというメリットもあります。

ただし、AL型の授業を行えば生徒の主体性が発揮されると考えるのは誤りです。グループワークをしていても、生徒同士が単に話しているだけでは主体的に学んでいるとは言えません。教師には、易しすぎもせず難しすぎもせず、生徒が本気にならなければ答えが導き出せない課題を与えることが求められます。また、グループでの話し合いに参加できていない生徒や、話し合いがうまくいっていないグループに対して、何か困っていることはないかと聞いたり、他のグループに教えてもらいに行くよう促したりするといった、教師が働きかける力量も問われます。学びの主体は生徒であるという本来の姿に立ち返り、生徒が本気で学ぶ状況を作り出すとともに、適切に支えることが必要なのです。

生徒が主体的になる授業とはどのような授業かを理解し、実践するには、そうした授業を実際に見ることが一番です。教師が多忙な現在、視察に行ったり、自主的な研究会を開いたりするのは難しいかもしれませんが、そうした場に積極的に出向き、生徒が主体性を発揮できる授業づくりに取り組んでいただきたいです。

高校の先生と話していると、「課題を与えれば取り組むが自ら勉強しない」「教科への関心が薄い」といった点などから生徒の主体性に課題を感じるという声が多く聞かれますが、生徒ばかりに原因があると考えのではなく、まずは日々の授業が、生徒にとって主体性を発揮できるものになっているか、振り返ってもらいたいと考えています。

アンケート

近年、高校生の主体性を引き出す教育が求められているが、高校の先生は生徒の主体性に課題を感じているのか。編集部では、ガイドライン読者の先生方にアンケート^(注)を実施した。すると、生徒の学習に対する主体性について「課題を感じる」が44%、「やや課題を感じる」が41%となった<図>。

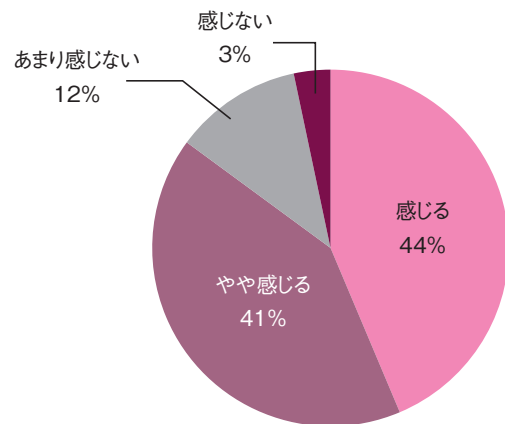
「課題を感じる」「やや課題を感じる」を選んだ先生に、どのような時に課題を感じるのか聞いたところ、教科の学習に関するものを中心に、さまざまなコメントが寄せられた。一口に「主体性」といっても、先生によって課題と感ずる点は異なるようだ。

学習に対する主体性を、概説で紹介したように「自発的、能動的に、自由に自分の意思によって学ぶこと」とすると、目立ったのが、授業への能動的な参加や、自発的な家庭学習の取り組みが少ないというものである。生徒の自発性ばかりに任せては生徒は学習しないのではないか、という指摘も見られた。また、学習する内容や取り組み方を自分で決められないという声も多く挙がった。そもそも学習内容への興味・関心が薄れていることで主

体的な学びができていないという課題もあるようだ。

さらにそうした課題は教科の学習にとどまらず、進路選択やクラブ活動、生徒会活動、学校行事などの面でも感じるというコメントもあった。生徒の主体的な学びを実現するには教員の意識改革、指導の変化が必要であるという指摘もあった。

<図>生徒の学習に対する主体性の課題



先生はどのような時に生徒の主体性に課題を感じますか。具体的にお書きください。

授業に能動的に参加しない

- ▶ 授業の板書を丁寧にノートにとるが、内容を理解していない生徒が見られる。
- ▶ 授業中に問いを発しても、教員が黒板に回答を板書するまでじっと待っているなど、自分で考えない生徒が増えた。
- ▶ 授業中に指示を聞かなかったり、眠ってしまう生徒が見られる。
- ▶ 基礎・基本事項がある程度定着している生徒は比較的良いが、そうでない生徒は受動的に学習に取り組む傾向があるように感じています。特に、講義形式で内容を説明・解説するとき感じます。
- ▶ 全体的に受身である。例えば授業で意見を求めても回答しなかったり、授業に対する意見を書かせても、白紙で通そうとする生徒も少なくない。

- ▶ アクティブ・ラーニングをさまざまな教科で導入しようとしているが、生徒がついてこない。教員と生徒の間に温度差を感じている。

自ら進んで学習に取り組まない

- ▶ 家庭学習時間が少ないことに課題を感じている。
- ▶ 宿題はやるが、自由提出とすると提出状況が悪い。
- ▶ こちらから提供しないと自ら進んでやることのない生徒が多い。課題はきちんとこなすがそれ以上のことを求めない。
- ▶ 課題をこなすことに終始し、自発的な学びへの意欲が感じられない。
- ▶ 授業の予習、復習をしている生徒の割合が少なくなっている。また、発展内容が書かれている教科書のページを示した時、教科書に目を落として読もうとする生徒が明らかに少なくなっている。
- ▶ 課題を与えたときしか学習しない。暗記型、演習型の課題には手を出す、思考型の課題に対する取り組みが弱い。

(注) ガイドライン読者の先生を対象に2015年7月に実施。回答数182件。

学習する内容や学習方法を自分で決められない

- ▶自分で学習する内容を決めることができない生徒が増えてきた。
- ▶学習の過程で、「次は何をしたらよいか」と聞きに来る生徒が増加している。
- ▶与えられた課題にはまじめに取り組むが、自ら進んで課題を見つけようとしないう傾向がみられる。
- ▶模擬試験の結果などから自分の課題を把握し、弱点補強に取り組むことができる生徒が少ない。与えられた課題はこなすが、自分に必要なものを考えて自発的に取り組むことができない。
- ▶与えられた課題や教材には真面目に取り組むが、自分で学習計画を立てることができない生徒が増えてきている。
- ▶成績が悪くなったとき、学習内容を自分で考えるのではなく、すぐに塾に頼ろうとする。

教科学習以外の面でも主体性が発揮されていない

- ▶進路選択においても周囲の雰囲気から影響を受け、主体的に選択できない生徒が、定期考査や模擬試験等の成績にかかわらず増加しているように感じる。
- ▶生徒会活動が、以前と比べて活発でなくなってきている。
- ▶クラブ活動の練習についても、指導者が方法を提示するのを待ち、自分たちで工夫して取り組めない生徒が増えている気がする。また、大会を勝ち抜くために、監督やコーチが細かな指示を与える高校も多い印象がある。
- ▶教師から指示されたことには素直に従うが、自ら主体的に物事を考え、実行するという状況になるとその一歩を踏み出せない生徒が多い。クラスをまとめるリーダーはいるが、学年全体をまとめられるリーダーが減ってきているように感じる。

学習内容等への興味・関心が薄い

- ▶主体的に学ぶ前に、学ぶことの必要性を感じている生徒が少ない。
- ▶何のために自分が学習しているのか、が成績上位の生徒でも明確でない場合が多くなっているように思える。
- ▶学習を自分自身のことと捉えていない生徒の割合が多くなっているように感じます。なぜ学習するのかを考えていないことが原因の一つだと思います。
- ▶生徒の「なぜ」や「どうして」という疑問が非常に弱く、授業で学ぶ内容以上のことを必要とせず、疑問にも思わない生徒が多いことをよく感じます。
- ▶授業には前向きに取り組む生徒が多いが、面談や日頃の会話を聞いていると、大学受験のためだけに勉強しているように感じる。

- ▶学習に対する目的意識が、大学進学のために偏りすぎている。
- ▶学校間で差はありますが、いわゆる「ゆとり教育世代」以降、興味のないこと、必要性を感じないことに対して、消極的な生徒が増えていると感じます。
- ▶教科の内容もそうですが、世の中の動きや、大学での学問に関する興味関心が薄れている気がします。

まずは「勉強させる」ことも必要か

- ▶まずは学習習慣と基礎学力がなければ主体的な学習はできないと思います。本校は進路多様校で、ほとんどの生徒が学習に対して主体性はないので、最初は強制的に勉強させ、その後、少しでも多くの生徒が主体的に学習できるように支援していますが、難しさを感じています。
- ▶教員間で価値観が分かれるところではあるが、主体性は、最初は強制することからでないと生まれないと思う。本校の長期の初期指導の到達目標は「3年生0学期」に自律的に学習ができることで、それ以降だんだん手を離すことができるように目線合わせをしているが、なかなか難しい。
- ▶出された課題には取り組んでも、自分からは勉強しない生徒が多い。家庭学習をすることが当たり前というところまで持っていけないと先に進めないの、課題は多めに、ただし易しめに出している。
- ▶主体性を持つ生徒はごく一握りだと思う。授業等では常に生徒を引っ張っていかないと成長は望めないと思います。

教員の意識、指導を変えることも必要か

- ▶生徒は勉強をやらされている感覚が強いのではないかと、一方で、教師側も教えることに一生懸命になりすぎているのではないかと感じる。
- ▶生徒は勉強を「やらされている」意識が強く、主体的に取り組んでいない。他方で、生徒の「やる気スイッチ」が入ったときに、教職員がいかにサポートできるか、研修も必要だと感じている。
- ▶生徒の主体性には、やや課題を感じています。ただし、生徒に根本的な主体性がないのではなく、出力の仕方がわからないからだと思います。主体性は、教員が何のための勉強か、何のための進学かなどを問いかけ、将来的なビジョンを持つよう、少しずつ根気よく促すことで身につけていくものです。教育現場が多忙で、そうした時間を教員が取るだけの余裕がなくなっていることが問題だと思います。
- ▶先生が変わらなければ生徒も変わりません。主体性を持たせるには、普段から主体性を要求する活動が必要です。そういった指導法の研究が、教員に不足していると思います。

▶現代の青少年は、大人への依存度が強いと思います。「教えてもらって当たり前」、「やってもらって当たり前」といった反応をよく耳に、目にします。これは、保護者、教員、

社会が過度の干渉を彼らの生活のあらゆる面に及ぼしている結果なのではないでしょうか。高校生に対する、大人の関わり方も変えていかなければならないと思います。

インタビュー

川本 英喜

教員が「やり方を示し、一緒に走る」ことで信頼関係を高め、生徒の主体性を引き出す

私は近年、教科の学習にしてもクラブ活動にしても、かなり具体的な指示をしないと、行動に移せない生徒が増えてきたことに主体性の課題を感じます。例えば、教科の自学自習についても、問題集を紹介するだけでは取り組めず、それぞれに適した問題をプリントして渡し、週に何題やるように、と指示する必要がある生徒も少なくありません。しかし、近年の高校生は素直ですから、教員がきっかけを与えて、やり方を示しながら一緒に走ってあげれば、多くの生徒は自ら学習に取り組むようになります。

生徒が以前と比べて、高校での学習に主体的に取り組まなくなっている原因の一つは、教員との信頼関係が希薄になっていることにあると思います。特に三重県は中学3年時の通塾率が67.6%と、全国平均60.9%と比べて高い（文部科学省『平成27年度 全国学力・学習状況調査』より）こともあり、学校の指導にあまり期待していない生徒や保護者も見られます。

そこで私は、学習方法を生徒に示すとともに生徒との信頼関係を高めるために、生徒に希望者を募って、個別に英語の添削指導をしています。この取り組みを本格的に始めたのは2013年11月前後で、担任をしていた2学年の生徒が対象でした。

生徒には、それぞれの成績や得意・不得意、志望する大学の入試問題の傾向などに合った問題集を配布。学習ノートを作らせて、定期的回収し、2～3日後に添削して返却するようにしています。

添削では、生徒のモチベーションを高める工夫をしています。例えば、修正すべき点を指摘したりアドバイスを書き入れたりするときにはピンク色や緑色のペンを使うようにしています。赤色では、テストの採点と同じ色になり、生徒がショックを受けるという声があったからです。また、よくできていたときには、シールを貼ったりスタンプを押したりするなど、「できた」と生徒が実感できるようにして返します。途中でやめる生徒もいましたが、多くの生徒は学習意欲を高め、添削課題に積極的に取り組むようになりました。さらに、他の問題集なども使いながら自主的に英語の学習をするようになることで、添削指導を受けた生徒は英語力を大きく伸ばしていきました。

最初はクラスで1～2人から始めたのですが、クラスメイトが添削課題に意欲的に取り組み、また成績を伸ばしていく様子を見て他の生徒にも徐々に希望者が増え、大学入試直前期までに、3年生279名中80名ほどが私の添削指導を受けていました。生徒からは非常に好評で効果も高かったことから、進路主任となり担任を持っていない今年も、50人ほどの3年生に添削指導をしています。

添削は時間も手間もかかりますが、生徒に寄り添った指導をすることは、教員への信頼感を高めていくきっかけにもなります。進路主任となったことで難しさもありますが、今後も添削指導を続けながら、授業を一層充実させ、生徒がより積極的に本校での学習に取り組めるような雰囲気を作っていきたいと考えています。それが生徒の主体性を引き出すための第一歩なのです。

**学習内容や学習方法を選ばせる
取り組みを通じて
主体的に課題解決をする経験を積ませる**

私は近年、学ぶ内容や学び方を自分で決められない生徒が増えてきた点に、主体性の課題を感じています。

生徒を見ていると、中学生の頃に塾に通う生徒が増えている影響か、課題を与えられることを待ち、言われたことを言われたままやろうとする傾向が強くなっている印象があります。

例えば、問題集を紹介した場合、以前の生徒であれば、得意な分野の基本問題は飛ばして不得意分野を重点的に解く、一度間違えた問題だけを繰り返し解くなど、工夫して取り組んでいました。それが近年は、問題集を与えられたら、最初のページから全ての問題を解こうとする生徒が増えている気がします。また、論述問題を添削指導すると、教員が指摘した通りに全てを直し、自分の解答に何が足りなかったのか、逆に元の解答の方が良い場所はなかったのかなどを考えない生徒もいます。つまり、目の前にあるものをこなすことが目的になり、自身の課題解決につながる学習ができない生徒が増えている印象があります。これは東京大学や京都大学を狙うような成績上位の生徒についても感じます。

そこで昨年度、私が担当する化学では、2年生の春休みに「学習内容・方法を考えさせる」宿題を出してみました。教科書レベルから大学入試レベルまで幅広い問題が掲載されている理論化学分野の問題集を配布するとともに、「苦手分野を中心的に解く」「教科書レベルの問題のみを解く」「大学入試レベルの問題を一通り解く」などといったA～Eのコース（解き方）を紹介し、自分に合ったものを選ばせるようにしました。そうすると、生徒は問題集への取り組み方にもさまざまな方法があることを知ることができますし、その中から選ぶことで、自分の弱点を見つめ、「何をすれば良いか」を考えるきっかけになったようです。もちろん、選んだコースの取り組み方が合わないと感じたら、他のコースに変えることも認めました。それぞれの習熟度に合った問題を解く

ことにより理解が深まる効果もあり、生徒も教員も手ごたえを感じた取り組みです。

**生徒の興味・関心を引き出すとともに
やりたいことを出せる環境が必要**

本校は2014年度からスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、「三重・四日市から世界へ！新たな価値を創造する国際人育成プログラム」を掲げて、さまざまな取り組みを進めています。全員が1年次に履修する「グローバル・マインド」では、「環境問題」「文化研究」「教育・福祉・ボランティア」「法・歴史問題」「医療問題」「グローバルビジネス」の6つのカテゴリから選んで探究活動を行い、その中で探究するテーマや、探究の際に調べる文献、まとめ方などは生徒自身に決めさせるようにしています。

半年くらいかけて教員が問いかけを続けると、独自性のあるものが出てくるのですが、授業の前半でテーマを設定させると、多くの生徒は似通ったものを出してきます。生徒が課題設定に慣れていないこともありますが、その一方で、本当は追究したいものを持っているにもかかわらず、取り組むテーマにも「正解」があり、それに近づけようとする意識が強く、本当に探究したいことを前面に出せない空気があるのではないかと感じます。高校には、まずは生徒の興味・関心を引き出すとともに、本当にやりたいことを出しても良いと思える環境を作ることが求められているのではないのでしょうか。

本校の卒業生は、将来は国内外でリーダーシップを発揮することが期待されています。社会に出てからは正解のない問題を解決することが求められますが、その際には自分が何をするのか、どのように解決するのか、どのように結論付けるか、自分で考えることが求められます。そこで、高校生のうちに学ぶ内容や方法を自分で考える経験を積むことが重要だと考えています。今後も、日々の授業やSGHの取り組み、学校行事や部活動などあらゆる場面で、生徒の主体性を引き出していきたいと考えています。

大 立 造形高等学校

山下 尚紀

**生徒の主体性を引き出すためには
教員自身が「教科を学ぶ意義」を
しっかり考えるべき**

私はこれまで、普通科の課題集中校といわれる学校、専門学科を併設し卒業生が進学する割合の高い学校、総合学科高校、そして現在の芸術系の専門高校と、さまざまな高校に勤務してきました。

生徒の主体性について気になるのは、学ぶ意欲が低いことです。ただしこれは現在の勤務校だけでなく、これまで勤務していたどの高校でも同様でした。進学志向の高い高校の時は進学講習などを実施し、大学受験を意識させることで生徒の興味・関心を喚起することも可能でした。

しかし、課題集中校などではそのような方法が通用しませんでした。また、進学志向がある高校でも家庭学習の時間を調べると、極めて少ない時間であることがわかりました。学力試験を課さない入試方式が増えるなど、大学への進学が以前よりも容易になったため、大学受験を意識した授業では、生徒の興味・関心を引くことはできなくなってきたのです。私の担当科目は化学ですから、文系の生徒にとってはなおさらでした。そこで、「なぜ、その教科を学ぶのか」を再考する必要性を強く感じました。

検討の結果、私は「賢い消費者になる」をテーマに授業を行うことにしました。健康不安を煽る広告を見て効能のはっきりしない健康食品を買ってしまうような人もいますが、その背景にあるのは、科学的な理解と判断力が不足していることです。そこで、物質の性質や化学反応の仕組みに重点をおき、「劇薬」でもその性質やどんな反応をするかを知っていれば、誰でも安全に取り扱うことができるようになるなど、物質をイメージだけで判断することがないように授業を工夫していました。

どの教科・科目でも、それぞれの生徒が学ぶ意味はあるはずですが、それを教員自身が考えて、生徒の状況に合わせて魅力ある授業をすることが生徒の主体的な学びにつながるのではないかと考えています。

**学校全体で議論を重ねることで
授業改善を進めることが不可欠**

生徒の主体性が十分に発揮されていないのは、高校教員の個々の経験値も関わっていると思います。特に若い世代の教員は、自身が高校生のときに、大学受験を強く意識した授業を受けてきたこともあり、そうした授業観を根強く持っている傾向が強いように感じます。担当教科を学ぶ意味を、生徒の生活や社会と結びつけて考える経験が不足しているのです。

生徒の主体性を引き出すためにはアクティブ・ラーニングが有効だと言われ、導入する教員も増えており、多くの場合は生徒が積極的に活動しています。しかし、その授業で考えさせるものが生徒にとって意味のあるものでなければ、活動を楽しむだけで、本当に主体的に学びに取り組むことはありません。つまり、教科を学ぶ意味をしっかりと考えた上で、授業方法を工夫していくことが重要なのです。

若手教員は新しい授業に取り組む意欲が高く、ベテラン教員には教科を学ぶ意義を考え続けてきた経験がありますから、世代の異なる教員同士でコミュニケーションをとり、どのような授業をするべきか、教科で、学校全体で議論していくことが必要だと思います。

特に近年は、高校生の気質も変化し、イベント型の指導ではメッセージが伝わらず、日々の指導の中で繰り返し伝えることで、少しずつ自分のものにしていく傾向があります。そのため、生徒の主体性を引き出すには、やはり日々の授業を改善していくことが不可欠なのです。

本校でも、教科単位での授業改善が盛んになりつつあります。本校は美術系・造形系の大学等に進学することを希望する生徒が多いことから、数学であれば「黄金比」を導入に使ったり、地理歴史であれば美術史や文化史を詳細に扱ったりするなど、生徒の興味・関心に応じた授業が多く展開されています。現在は教頭ですので私自身が授業をする機会はありませんが、管理職として、そうした取り組みを応援しながら、生徒の主体性を引き出していきたいと考えています。